

力を結集して開設できた福祉避難所 災害弱者への24時間支援に向けて

医療法人資生会 高橋靖幸さん

——まずは「デイサービスたんぽぽ」の概要を教えてください。

札幌市に本部を置く医療法人社団誠医学会の事業所の一つで、鶴川地区を営業



高橋 靖幸さん

範囲として通所介護事業を行っています。定員は38人で、平均利用者は30人程度。要支援2から介護1の高齢者が利用し、全体の3〜4割を独居の方が占めています。

——震災当時を振り返ってください。

明け方に地面から突き上げるような揺れを感じて、目が覚めました。苫小牧市の集合住宅に住んでいましたが、上階から水が漏れてくるほどだったので、「ただ事ではない」と思いながら事業所に向かいました。

道中は信号が消えていて、道路がいたる所でひび割れ、いつもなら30分ほどで到着する道のりを1時間以上かけて事業所にたどり着きました。

——事業所はどのような状況でしたか？

併設する「四季の館」には、すでに避難された方がたくさん集まっていました。事業所の鍵を四季の館に預けているのですが、地震で散乱しており、なかなかキーボックスを見つけることができませんでした。

何とか事業所の鍵を見つけて状況が明らかになっていく中で、何よりも利用者さんの安否が気になりました。集まっていた職員3名と共に、怪我をした利用者さんがないか確認するために厚生病院へ向かいました。

した。その途中で倒壊した利用者さんのお宅を見つけましたが、近寄ることもままありません。その光景を見て、ほかの利用者さんの様子がとても気になりました。その後、職員間でSNSを活用し、避難所にいる利用者さんの状況を報告し合ったり、電話でご家庭の状況を確認するなど、安否確認に努めました。幸い、入院するような怪我を負った方は一人もおらず、安心しました。

——発災から約14時間後、迅速に福祉避難所を開設されていますね。

いったん自宅に戻った時に、町の災害対策本部から「デイサービスたんぽぽを福祉避難所として開放してもらえないだろうか」と打診を受けました。その前に別法人

である「デイサービス日和」から災害対策本部に「避難所での対応が困難な高齢者がいる」と報告があり、一般の避難所での生活が困難な方々を受け入れるための避難所である「福祉避難所」の開設が必要だと判断したそうです。早速、法人本部に報告したところ、了承が得られたので、デイサービスたんぽぽとデイサービス日和が協力して、発災当日の夕方に福祉避難所を開設しました。

町内の別施設が本来の福祉避難所として登録されていたのですが、停電や備品不足などにより、福祉避難所を開設できる状況にありませんでした。当事業所では四季の館の自家発電を使用することができましたし、立地も良く利便性が高いため、当事業所が福祉避難所の開設場所として選ばれたのだと思います。

開設後は、町の保健師が在宅の要介護者宅の巡回と、各避難所と連携した情報収集によって支援対象者の方を見つけて、福祉避難所への避難を誘導していったそうです。

——福祉避難所ではどのような活動をされたのですか？

家での生活が心配な独居の高齢者や、車いすを利用してのことにより、避難所での生活が困難な方とご家族、合計18人（うち家族4人）の受け入れを行いました。布団などの用意は当事業所、食事の用意は食材のストックがあるデイサービス日和が、それぞれ分担して行いました。

最初は何から手をつければよいのかわかりませんでした。誰がどのように指揮を執るべきかでも戸惑いました。経験の長いデイサービス日和の相談員に生活面の指示を出してもらい、私は施設管理に当たるなど、それぞれ役割を持って活動しましたが、最初はまったく手探りの状態でした。受け入れについても、むかわ町の担当者が心身の状況を客観的に判断して福祉避難所での受け入れを決定していましたが、明確な基準を設定していなかったために受け入れ時のトラブルも生じていました。

当事業所で働く町内在住の職員は、自宅が被害を受けているはずですが、初日から10人くらいが自発的に集まってくれました。福祉避難所として24時間体制が求めら



福祉避難所が開設されたデイサービスたんぽぽ

勤で6名以上、夜勤で3、4名を配置しました。3事業所が力を結集してできた体制であり、発災直後での事業所も大変な状況でしたが、幸いにも人が足りないと感じることはありませんでした。

——利用者さんとはどのように接しましたか？

「ふだんと同じようにデイサービスたんぽぽに通所している感じで過ごしましよ」とお伝えしました。このような状況なので体操などは行いませんでしたが、皆さんは音楽を聴いたり、おしゃべりをしたりして過ごしていました。今後のことを考えると気持ちが落ち込んでしまうので、明るい気分になるような声かけを意識しました。

——慣れない集団生活で避難している方から不満などは出ませんでしたか？

初日の夜間に「腰が痛くてここでは眠れないので、家に帰る」と言う避難者がいました。保健師につないで相談しましたが、やはりご自宅で過ごしたいとのことでした。避難が必要な状況でありながら、慣れない環境での不安から、ご自宅で過ごすこ

とを選択された方もいました。

——ふだん関わりがない高齢者への対応には苦労されたのではないですか？

この方はこの薬を必ず飲まなければならぬとか、夜中に物を食べる方がいるなど、一人ひとりを理解する難しさはありましたが、接しながら少しずつ理解を深めていきました。何度かDMAT（災害派遣医療チーム）に訪問してもらい、火傷や骨折の方を診察していただいたり、医療機関を受診するようアドバイスをいただきました。

——断水の中でトイレや入浴はどのように対応されていましたか？

断水のためにトイレの水が使えず、その都度、ペットボトルの水で汚物を流していました。また、デイサービスの浴室は四季の館の温泉水を利用していましたが、配管が壊れたので使えませんでした。

——福祉避難所は1週間の期限付きで設置されたと聞きましたが。

最初は設置期間を定めず「避難する人がいなくなるまで」としていました。利用者

多いと感じました。

私としては、ふだん話す機会がないほかの事業所のスタッフや役場の職員さんと会話や食事ができたこと、目的を一つにして連携できたことが新鮮でした。今後もこのように協力できる体制が構築できればいいと思います。

——福祉避難所の解散後は、通常のデイサービスを円滑に再開ができましたか？

たんぽぽは9月17日に再開しましたが、食事を委託していた業者が対応できない状態だったため、10月中旬まで四季の館で行われていた自衛隊などによる炊き出しを利

さんは最大25人くらいまで増えましたが、ボランティアさんに自宅を片付けてもらい帰宅される方や、ほかの事業所のショートステイを利用される方、ご家族に引き取られる方など、徐々に避難者が減っていき、結果的に1週間で解散することができました。

震災後1週間というきわめて不安定な時期に、町内の避難所から災害弱者を集めて集中的に支援できる場所を設けられたことで、間接的にほかの避難所の安定的な運営につながったそうです。

疑問を持たずに必要に迫られてスタートしたことが、福祉避難所を円滑に運営できた要因だと思います。本部の命令で動く場合は、いちいち指示を仰ぐ必要があったり、現場とのずれが生じやすいのですが、今回は現場の判断を尊重してくれたことがスムーズな対応につながったと思います。

逆に言えば、今後災害が起きた場合、福祉避難所の開設が任意なのか義務なのかによって行動も変わってくるかもしれません。福祉避難所を開設している間、収益は一切ありませんでしたので、あらかじめ法人内で決めておかなければならないことも

用させていただきました。送迎中に余震に遭うなど、12月くらいまで落ち着かない日々を過ごしましたね。

——震災後に町と協定を結んだそうですね。

私たちを含む5つの事業者とむかわ町との間で協定を結びました。震災時に町と事業所が協力し合い、横断的に対応する内容になっています。今回の被災経験を活かし、これからの災害時に備えた支援体制の構築につながりました。

——最後に読者の皆さんへメッセージをお願いします。

この先、災害が発生しないことが一番良いことですが、残念ながら保証はありません。再び災害が発生した場合は今回の経験を活かし、避難された方が不安を感じないように笑顔を絶やさず対応したいと思います。



デイサービスたんぽぽに隣接する四季の館の様子(上：避難所受付 下：避難所内)